

Meet Executive

New Skies Satellites 社 Koh 副社長にきく



Dr. Eui K. Koh 略歴

- ・ Dr. Koh は New Skies Satellites 社のアジア太平洋地域担当副社長として、同地域でのセールス、マーケティング、ビジネス開発を統括。
- ・ 同氏は通信業界にて 30 年の経験を有し、PTC、APT、APSCC の要職を歴任。
- ・ NSS 入社前には、INTELSAT にて主として次世代衛星システム開発の中心的役割を果たしたほか、American Satellite Corp, Hughes Network Systems でデジタル衛星システム設計を担当、さらに、韓国電気通信研究所のアドバイザーとして、Koreasat のシステム設計にも参画。
- ・ ソウルにて電気工学学士、米国にて電気工学修士および PhD を取得。IEEE シニアメンバー。

Koh さんは長年の間、世界の衛星通信技術やビジネスの発展をリードしてこられたわけですが、この間でもっともエキサイティングで、かつ思い出にのこるお仕事は何だったのでしょうか。

Koh: 何年か前に、私がインテルサットでアジアマーケットを担当していましたときに、私はインテルサットが 95° E にもっていた軌道を使ってアジア地域むけの、全 Ku バンドの高出力衛星を提案したことがあります。当時インテルサットは大陸間の国際通信を一手に扱う事業者でしたので、インテルサットの出資者にとって、地域通信というのは驚きだったわけです。

私は当時、大陸間の空の上と水面下に何が起こりつつあるか認識していました。アジアの有力な事業者は、大容量の海底ケーブルの建設を進めていましたので、

太平洋にまもなく大容量の通信回線、特に2地点間の大容量幹線がケーブルによって提供されるようになることを予測するのはやさしいことだったのです。それに私は、衛星通信は、衛星の有利な点、すなわち一地点から多地点への通信を追求すべきと信じていました。

私がこの地域衛星の構想をアジアの主要なキャリアに提案したところ、KTもSingTelもST Telemediaもテレコムマレーシアも、チャイナテレコムも、さらに米国のDBSの有力オペレーターの一社までもが、大変前向きな反応を示してくれ、今にもスタートという状況にまでなったのです。インテルサットのボードメンバー達は、アジアの出資者からのファンドがうまく行きそうだとすることも認めました。

ところがそこで事態が一変したのです。「この衛星プロジェクトがそんなにいいのなら、インテルサットが自分で衛星を打上げ、運用すればよいではないか・・・!？」

私は、もしこのプロジェクトが当初の構想のようにジョイントベンチャーとして進められたら、どう展開していたかな、と今でも思います。

間違いなく、これが私が今迄に関係したもっともエキサイティングな衛星プロジェクトでした。私がこの経験から学んだのは、ビジョンはとても重要だが、この実現には、ビジョンそのものをフォローしてゆく幸運が必要だということでした。ローマはジュリアスシーザーのビジョンだけによってできたのではなく、彼のビジョンに対し多くのサポーターがいたということですね。

現在 NewSkies で担当しておられるお仕事の中でもっとも難しいことは何でしょうか。

Koh : 衛星産業は、従来多かった2点間のサービスが減少し、新しいサービスが技術的にもコスト的にも効率よく提供される方向への過渡期間を通過しているように思います。この難しい時期に大事なことは、カスタマに提供するサービスにフレキシビリティをもつこと、それにカスタマの要求する価格に対応できること、の2点だと思います。

アジア太平洋地区の多くの国では、今もってカスタマ施設への安価な幹線とローカルループを持たずにおり、衛星はこれらの低レベルサービスの地域にとって、

理想的な解になるわけです。

New Skies は、4つのグローバルな衛星サービスプロバイダのひとつとして、現在でも、3つの大洋地域でわずか6個の衛星を用いて世界レベルの衛星サービスを提供しています。私共は、最適サービス提供のために衛星容量を最適化していますが、それでもインド洋地域のような特定のルートでは容量が不足しています。

現在 57° E のNSS-703 は、ほとんど満杯の状態ですが、通信業界の過剰インフラ建設の傾向に衛星も例外でなく、アジア地域では衛星の容量にも供給過剰が生じています。New Skies は高出力の多目的衛星NSS-6 を 95° E の軌道に、こういうきびしい状況の中で打ち上げようとしていますので、来年以降NSS-6 のトラポンを売ることが大きなチャレンジになってくるわけです。でも、我々はこの衛星は設計上、極度にフレキシブルにしていますので、この衛星がアジア地域のビジネスに最適との確信を持っています。



NSS-6 衛星

今後 10 年ほどの間に、アジア太平洋地域での衛星通信のビジネスの状況はどのようになってゆくと見ておられますか。この地域での New Skies のビジネス戦略はどう立てておられますか。

Koh : 通信業界はとても速く変化するので、今後 2 年先のことすら何がおこるか予測するのは難しいですね。2 年前迄は、多くのアジア事業者は、太平洋地域の需要は 3 ヶ月ごとに倍増するだろうと予想していました。

その後、ご承知の通り、ワールドクラスの主要なキャリアが Chapter 11 クラブ (笑) に加入してきたのを見てきたわけです。驚いたことに、少なくとも G E O オペレーターはひとつもクラブ入りしませんでした。多くの L E O システムはサービス開始すらせずにつぶれました。

我々の今後数年間へむけての戦略は、巾の広いサービスを提供するために、我々のグローバルな衛星フリートを強化することです。アジア太平洋地域では、New Skies はインドと中国市場へサービスするために前進を続けており、中国については北京にオフィスを開設します。私共は東南アジアおよび北アジアのマーケットにも活発に進出努力をしており、現在、6 つの D V B - I P プラットフォームを提供し、インドと東南アジアで好評を得ています。D V B - I P プラットフォームでは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにサービスを展開しており、世界でもっとも成功した衛星 D V B - I P プラットフォームのプロバイダではないでしょうか。

衛星通信が、コストと高速性で急速な進歩をしている地上ネットワークに対し、独自の地位を保持するために必須の新技术や新たなビジネススキームはどんなものとお考えですか。

Koh : 2 地点間結合では衛星はファイバには勝てず、マルチキャストが、衛星が独自の地位を確保するために理想的だと思います。

私共の新しい高出力 Ku、Ka 衛星 N S S - 6 (95 ° E) は 2 0 0 2 年 1 1 月に打上げられますが、これは 9 5 ° E という戦略的な軌道位置でアジア全域をカバーする最初の衛星になります。

この衛星はアジア太平洋地域でもっとも設計が新しくフレキシブルということが出来ます。すなわち音声、データ、インターネット、V O I P、D T H、コンテンツ配布、遠隔教育など何でもできる大変融通性に富んだ汎用衛星なのです。

NSS 6は、中国、北東アジア、東南アジア、インド、オーストラリア、中東（東地中海のキプロスまで）をカバーする6本の独立ビームを持ちます。この6ビームを市場の要求に応じて、50本のKuバンド36MHzトランスポンダと接続するのです。さらに、10本のKaバンド超高ゲインアップリンクスポットビームにより、地上90cmの小型アンテナで高速データ通信が可能であり、これらのKaバンドアップリンクビームは、次にKuバンドリモート局にクロスストラップされて、高速データを流すことができます。

この衛星のもうひとつの大きな特徴は、衛星が高受信感度を有することで、これにより小さなアンテナから衛星へアップリンクできます。これは企業関係のユーザが遠隔教育に使うのに最適となるでしょう。



NSS-7 打上げ

アジア太平洋地域の衛星オペレータが世界的なコンソリデーションの傾向や、地上ネットワークとの競争の環境の中で生き残るために、オペレーター同志でどのような協力が行われるとと思われますか。

Koh : 世界の経済状況から、衛星業界はスケールメリットを達成するためにコンソリデーションの途を強要され、中小の地域衛星システムは、より大きなグローバルシステムに参画するか、他の地域システムと合併するかのいずれかを選ばねばならないでしょう。大きくなればなるほど、グローバルなサービスをより効率的に提供できるようになるからです。

日本の衛星通信業界を、アジア太平洋の他地域の業界と比べて、今後10年間の成長性の点でどう評価されますか。

Koh : 私は、日本では衛星のサービスがよく行われていると思います。日本の衛星通信のマーケットは日本のオペレータのために確保されているのですが、日本の衛星オペレータが外に出て、他の地域衛星サービスプロバイダと競争したければ、日本の国内マーケットも海外のオペレータにもっと開放されねばならないでしょう。どのようなマーケットについても、衛星オペレータは遠隔教育、高品質、デジタルシネマなどのような新しいアプリケーションを必要とするでしょう。

最後に Kohさんは週末などのお休みの日にはどのように過ごされるのですか。

Koh : もっぱらゴルフと歴史書を読むことで過ごしています。

どうもありがとうございました。

(インタビュー担当：植田 剛夫)